慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	倫理学者としてのアダム、スミス
Sub Title	
Author	川合, 貞一
Publisher	三田学会
Publication year	1911
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.5, No.3 (1911. 4) ,p.234(24)- 251(41)
JaLC DOI	10.14991/001.19110415-0024
Abstract	
Notes	アダムスミス紀念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19110415-0024

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

倫理學者としてのアダム、スミス

川合貞一

一

アダム、スミスの『國富論』が世に現れてより、本日で丁度百三十五年になると云ふので、三田讀書會主裁の下に、其の紀念會が開かれ、余も此の席に臨んで、哲學者、殊に、倫理學者として、この渠の風丰を偲ぶことを得るは、洵に光榮とする所である。

スミスは今日に於いてこそ、殆んど唯、一個の經濟學者に過ぎないかのやうに考へられてゐるものゝ、渠が『國富論』を公にする以前に於ては、專ら哲學者として其の名を知られてゐたのである。渠は一千七百五十九年に『道德的情操の理論』と題する大著を公にし、倫理學上の思辨を發表した。この『道德的情操の理論』なるものは當時の學界に於いて頗る學者の注意を惹いたもので渠の盛名をして遠く大陸にまで馳するに至らしめたのである。而して『國富論』なるものも、實は『道德的情操の理論』と同じく、渠がグラズゴー大學教授在職中、道德哲學（モーラルフィロソフィー）の講座に於いて爲したる

講義に基いたもので、要するに渠の道德哲學系統の一部を構成するものに外ならぬ。然らば道德哲學とは何んであるかと云ふと、渠は之を個人としてのみならず、家族、國家、人類てふ大社會の一員としての人間の幸福及び完成を論ずるものであると解したのである。『國富論』と『道德的情操の理論』の關聯を有するものなることは前述の如しであるが、然かし、此の兩者は必ずしも同じ根本原理の上に建設されてゐるものではない。ヴントも謂つてゐる通り、『國富論』に於いて渠の採れる見地より『道德的情操の理論』に於ける渠の見地を察することは至難である。即ち一方に於いては自利を以つて人間行爲の主なる動機と爲し、他方に於いては寧ろそれと反對の同情を以つて其の理論の基礎としたのである。

是に就いて英國文明史の著者バックルはかう云ふ意味のことを謂つてゐる。アダムスミスは人性の二つの傾向を各抽象的な形に於いて、之を是定し、而して演繹的に其の論歩を進めてゐる。即ち『國富論』に於いては人間を以つて全く私利に動かさるゝものと爲し、『道德的情操の理論』に於いては全く仁愛に動かさるゝものと爲して、之れから演繹してゐると。然かしこの兩者を以つて、絶對的に相反す

るものと考へるのは妥當の見であるとは云へぬ。其上、渠は必ずしも純然たる演繹的方法を採つたものでもない。然らば渠は此の兩者の關係を如何に考へたであらうかと云ふと、是には明答を與へることが出來ぬ。何んとなれば、渠は人性の二つの傾向に就いて、深く其の心理的並に歴史的研究に入らなかつたからである。が『國富論』に於いても、全く渠の倫理的、社會的見地を捨てたものと見ることが出來ぬ。

二

フィヒテが「我に性格を告げよ、然らば其人の如何なる哲學を採用すべきかを汝に談らむ」と云つた如く、哲學と哲學者の爲人とは離るべからざる關係を有してゐる。されば茲にアダム、スミスの倫理學說を述ぶるに先つて、其の爲人と經歴の大要を、しかもそれと交渉を有すと考へられる限りに於いて語るのは必ずしも無用の事ではない。

アダム、スミスは一千七百二十三年六月五日の生れであるが、父なる人は渠の生まれる數ヶ月前に亡くなつてゐたのである。子供の間は病身で身體が弱かつた所から、手の掛ること一通りではなかつた。が母親は非常に渠を愛したのである。

これに對してスミスは六十年間も一向孝養の道を盡して、母親の慈愛に報いたのである。渠の家は富めると云ふ程ではなかつた、然かし、生計には少しも不自由を感じなかつた。渠はかう云ふ境遇の下に人と成つたのであるから、自づから、功名利達の念に淡く、常に平靜知足の生活を樂んだのである。渠はかう信じた、幸福と云ふものは帝王でも乞食でも無差別である、而してこれに達するには足るとを知るのが肝要であると。渠答ふて曰く「健康にして負債を有せず、且つ瑩明なる良心を有する人の幸福に何物の添加せられ得べきか」と。以つて渠の爲人と其の人生觀とを察すべきである。

スミスは十四歳にしてグラスゴー大學に入り、スコットランドに於ける近代思辨哲學の始祖と呼ばれたハチソンの講義を聽き、感發する所が尠くなかつたのである。渠が心を倫理的思辨に寄するに至つたのは、主として其の影響に基づくと云つてよい。渠は十七歳にしてグラスゴーよりオックスフォードに送られ、七年間在學した。が、其の間の生活に就いては殆んど知らるゝ所がない。然かし、唯一つの奇談が殘つてゐると云ふのは、スミスがバリオルカレッジの自身の室でヒュ

ームの『人性論』を讀んでゐる所を目付つて、それを沒收され、譴責を受けたと云ふことである。此の談の眞僞は明ではないが、兎に角かゝる談の存してゐる所を見ても、カレッジ時代に於ける渠の精神的傾向が略推せられるやうに思はれる。

ヒュームと實際交を結ぶに至つたのは何時頃からであるか、確とは知られてゐない。が、なんでも一千七百五十二年の前であるやうに考へられる。スミスは一千七百五十一年、二十八歳でグラスゴー大學の論理學教授に選まれ、翌年道德哲學教授に轉じ、其の職に留まること十三年の久しきに及んだ。而して其の間の講義は主として道德哲學に關するもので、渠の弟子にして且つ昵近の友なる人の語る所に據ると次のやうである。

「道德哲學に關する渠の講義は四部に分たれた。第一部が自然神學で、玆に渠は神の本體及び屬性の證明と、宗教の基づく人心の原理とを考察した。第二部が嚴密に謂ふ所の倫理學で、主として後に『道德的情操の理論』に於いて公にされた教義から成立つてゐた。第三部に於いては渠は、細密な規則を立つるを得る所から充分特別な說明を下し得る、正義に關する道德の方面を一層詳細に論じたのである。

この主題に於いては、渠は、モンテスキューによつて暗示されたやうに思はれる案に從つたのである。最も蒙昧な時代より最も文明な時代に至るまでの公法並びに私法の漸次の發展を尋ね、而して生存及び財產の蓄積に貢獻する所の諸の技術が、法律上及び政治上に於いて、それに相當する改善若くは變革を生ずる結果を指摘せやうとした。重要なこの方面の研究を渠はまた世に公にせやうと思つてゐたので『道德的情操の理論』の決論に之を述べてゐる。が、この意向は天年を渠に假さゞりし故を以つて實現さるゝに至らなかつた。

渠は講義の最後の部分に於いて、正義の原理にあらずして便宜（エキスピヂエンシー）の原理に基づき、而して國家の富と力と繁榮とを增すと考へらるゝ政治的條規を吟味し、かゝる見地の下に渠は商業、財政、宗教、軍事に關する政治上の制度を考察したのである。此等の主題に就いて講述した所のものが、後に『國富の性質及び原因の研究』と題して世に公にせられた著述の實質を成してゐる。」と

スミス大學教授の職を辭して後、バックリュー公に從ひて數年間佛蘭西に遊び

巴里に於いて知名の文士や哲學者と交を結んだが、この外遊は渠の倫理學説に對しては殆んど沒交渉である。

三

アダムスミスは哲學なるものを如何に考へたかと云ふと、渠は之を自然を結合する原理の學としたのである。即ち哲學なるものは、連絡のない物を結合する、目に見えぬ鏈鎖を示して、不調矛盾の現象の混沌たるが中へ、秩序を導き入れやうと努力するものである。で、哲學によつて自然の演劇が想像に對して一層結合した、從つて一層宏大な觀物となるのである。然しそれには其の結合の原理が、すべて人類に熟知せられたやうなものでなければならぬと云ふのである。渠は哲學のこの一般觀念を先づ自然科學に應用したのである。が、これは倫理學にも經濟學にも等しく當て嵌まるのである。

渠はかく哲學を叙述した後にかう云ふてゐる。哲學と云ふものはよく秩序の立つてゐる社會に於いてのみ起ることの出來るものである。即ち生命と財産の安固の存する社會に於いてのみ起ることの出來るものである。野蠻人は哲學なるものを有せずして多神教と拜物教とを有してゐるのみである。而して何んでも常例に外づれたものがあると、之が自然の進行を止め或は之を變ずる所の、目に見えぬ神の手に歸して了うのである。勿論、渠自身も目に見えぬ力の現存を認めてゐるが然し、之は人間行爲に於ける秩序と法則との原因としてゞあつて、野蠻人のそれとは異れる平靜な哲學的意見なのである。斯る意見は驚異(リンダイ)をして恐怖に代るを得せしむる平穩な社會の存する處に於いてのみ起り得るものである。而して渠は哲學の第一の動機は實利ではなくして好奇心である。して其の研究は有益と云ふことには何等の關係なく、其れ自身目的として行はるゝものであると考へたのである。實にアダム、スミスはかう云ふ意味での眞の哲學者であつたのである。渠が倫理學の研究をやつたのも又經濟學の研究をやつたのも他の動機からではなくして、全く眞理其物の愛からである。即ち混沌たるが如く見ゆる處に、秩序を發見せやうとの一念からであつたのである。是れ全く渠の爲人の然らしめたものに外ならぬ。

四

ハチソンはシャフツベリーの後を承けて、道德感（モーラルセンス）の說を主張し、我々は外界の事物を認識する所の感官を有するが如く、是非を感知する所の能力を本來具へてゐるものである。而してこの能力は一層單純な要素に分析することの出來ないものであると唱へたのである。ハチソンのこの道德感の說にはヒュームもスミスも大體に於いては贊成をしたのであるが、然かし、ハチソンの如く之を一層單純な要素に分析を許さぬものとは見ずして、之を一層普遍な他の原理に歸せやうとしたのである。ヒュームは道德上の稱讃及び非難の幾多の場合を研究して、我々の德と稱するものは、卽ち自他に何等かの利益を與ふるか、若くば自他に何等かの快感を生せしめる點に同情することに外ならぬと說いたのである、換言すれば、是非の感知は自他の利益、快樂に對する同情に基づくと說いたのである。スミスはヒュームのこの說を全然否定することはしなかつた。然かし渠は行爲の結果に對する同情と云ふよりも、寧ろ其の動機、感情に對する同情を以つて之を說かんとしたのである。

スミスの倫理學說の根本原理は、我々の道德的感知の第一の對境は他人の行爲、

情感であつて、自己の行爲に對する道德的判斷は、他人の行爲、情感に就いて下した裁決を、自づからに應用するに止まると云ふことである。

蓋し我々の道德的判斷は二つの異なれる感情を含んでゐる。卽ち行爲、感情の正當なるや否やを感ずることと、其の效果を有するや否やを感ずることである。前者を渠は恰適の感（Sense of Propvicty）と呼び、後者を渠は效果の感（Sense ot merit and demerit）と呼んだのである。恰適の感に就いて渠の述べてゐる所は次の諸點である。

一、如何なる場合に於いても、他人の心中に起る所のものに就いて、何等かの觀念を形成することを得るのは、全く自己の經驗に出るのである。卽ち其の人と同じ境遇に自づからを置き、我若しさあらんには如何なるべきかと想像して、初めて他人の心事を解することが出來るのである。他人の境遇に我身を置き、而してそれより起る情感を共にする我々の性質を指して、渠は同情（Sympathy or fellow-feeling）と呼んだのである。

二、同情は常に双方に快樂を與へる。卽ち自づからの或る境遇に在る場合に、傍觀者が我と同じ境遇に入り、情感を共にするを知れば快樂を覺える。而して又傍

觀者の方に於いても、情感の一致するを知れば快感を覺えるのである。

三、傍觀者が他人の境遇を我が身に引きあてゝ其の人と、同樣に感ずることが出來れば、其の人の情感を以つて正當なものとする。この情感一致の知覺が道德的稱讃の基礎である。

四、我々が他人の境遇に自己を置く時には、其の人の感ずると同じ種類の情感が我々の心中に自然に起つて來る。然かし、この同情的情感の力は比較的弱い。そこで相互同情の快味を得んが爲めに、一方に於いて傍觀者は出來るだけ其の情感を高め、他方に於いては當の人は其の情感を傍觀者のそれと出來るだけ平均するまで引き下げる。

五、この二樣の努力に基づいて二種類の德が生じて來るのである。卽ち當の人の情感と一致するまで自己の情感を高めやうとする所から寬容慈愛と云ふやうな愛すべき德（Amiable virtue）が生じて來る。而して傍觀者のそれと成るべく一致するまで、自己の情感を引き下げやうとする所から、克己自制と云ふやうな敬すべき德（Respectable Virtue）が生じて來るのである。

道德的判斷の他の方面を爲せる價値の感に就いても、スミスは恰適の感と同じ樣に、之を同情の原理に基くものと考へたのである。蓋し恰適、不恰適と云ふのは、情感が其原因に適合すると然らざるとに關するものであつて、効果、無効果と云ふのは情感の惹起すべき結果に關するものである。處で、情感の傾向が有益である時には、之を惹起した當の行爲は賞すべき者と思はれ、其が有害である時には、罰せらるべきものと思はれる。而して賞罰なるものは謝恩と怨恨とから起つて來るものであるから、彼の人は賞せらるべき人であると云へば、卽ち或人に取つて、公平な人ならんには何人も同情すべき謝恩を受け得べき人であると云ふことになる。

然かし我々は人が他より恩惠を受けたからと云つて、其の恩惠を與へた當の行爲者の動機に同情するでなければ、其の人の謝恩の情に同情することは出來ぬ。で、効果（メリット）の感は恩惠を受けた人に對する間接の同情と、恩惠を與へた當の行爲者の情感及び動機に對する直接の同情とから成つてゐる、複合情操であると云はなければならぬ。無効果の感もまた其の通りで當の行爲者に對する直接の反情と、其の行爲を受けた者の怨恨に對する間接の同情とより成つてゐる、複合情操である

と云ふべきである。

で、賞せらるべき行爲は、恰適の動機より生じ來れる有益な傾向の行動であり、罰せらるべき行爲は、それと反對の動機より生じ來れる有害な傾向の行動であると云ふことが分かる。

渠は進んで正義の感の起原に就いて述べてゐるが、正義の感なるものも同情に基づくものに外ならぬ。蓋し我々が世の同情と稱讃を得やうとするには、己が幸福を自己の立場より之を見ずして、人類一般の立場より之を見ることが必要であり。而して又故なく害を受くれば社會は己が怨恨に同情するし、故なく害を他人に加へると社會は其の人の怨恨に同情して、己は一般的憤怒の目的物となるのは明かである。さう云ふ所から正義の感が起つて來るのである。

次にスミスは、其の初め他人の行爲に對して下した判斷を自己に應用する所より、如何にして本務の感が生じ來るかを研究した。渠は稱讃、非難の意識に關する事實を述べて其研究に入つたのである。蓋し有德なる賢者の目的とする所は周圍の人より實際稱讃を博するやうに行動するのではなくして、自己を彼等の稱讃の

正當な對境たらしめるやうに行動するのである。而して自己の行爲より生ずる滿足なるものも、この稱讃を實際享樂する意識に基づくのではなくして、寧ろこの稱讃に値すといふ意識に基づくのである。然かしこれが必ずしも本具の道德的能力の存在を示すものではない。惟ふに我々の道德的情操は他人の情操と何等かの關係を有するもので、若し人が同類との交通なくして成人することが出來るとするも、其の人は自己の美醜に就いて考へることが出來ないと同樣に、自己の品性に就いても考へることが出來なからう。勿論我々の胸中には、我々のあらゆる行爲の批判者があつて、世を擧つて稱揚するもなほ我を苦しめ、世を擧つて非難するもなほ我を助けるものが存してゐるには相違ない。然かし其の起原を尋ねるとやはり大部分は外部より派生したものに外ならぬ。

人が始めて世の中に出た場合には暫らくはよくすべての人の好意と稱讃とを得やうとするのであるが、然かし間もなく其の不可能なるに心附くやうになる。最も公平な行爲でも他人にはさう見えないことが屢々あるのである。そこでさう云ふ不公平な判斷を避けるが爲めにすぐに己が心中に自づからにもまた他人

にも何等特別な關係のない批判者を立て、其の人の面前に於いて行動しつゝあるかのやうに自づからを考へ、而してこの想像上の公平な傍觀者の稱讃を求めるやうに行動するに至るのである。

人が自己の行爲を吟味し、公平な傍觀者の見地より之を見やうとする機會は二つある。卽ち將に行動せんとする時と、行動を了つた時とである。人が將に行動せんとする時には情の爲めに激せられてゐるし、また行動の了つた時に情の靜まるを以つて、前よりも一層冷靜に公平な傍觀者の情操に入ることが出來るには相違ないが、己を惡しざまに考へるのは不愉快である所から自己を、欺くやうになる。この自欺を防ぐが爲めに自然は、我々を導いて、不知不識の間に、他人の行爲の觀察より道德上爲すべきものと、爲すべからざるものとに關する一般的規則を立てしめるやうになる。他人の行動の中には自己の何れの情操にも戻るのがある。而して自己以外の人もわれと同じ感じを懷くのを見れば、己が非難の正當であると云ふ信仰を確くする。そこで、さう云ふ行動は避けらるべきものだと云ふことを一般的規則と定め、常習的考慮によつて之を自己の心中に固定しやうとする。かゝる一般的規則の尊敬が、正しく本務の感と呼ばるゝものを爲すのである。

スミスは道德を以つて宗教を離れて獨立に存し、又理解され得るものと考へたのであるが、然かし、渠の理論の背景には明かに宗教が立てゐるのである。渠はかう考へた。我々の道德的能力なるものは我々の中に於ける神の代理者であつて、其が與ふる規則は卽ち神の法則であると。又かう考へた道德的能力の與ふる規則に從ふのが人類の幸福を進める最も有効な道である。而して人類の幸福なるものは神の本來の目的らしく思はれるからして、道德的規則に從ふのが卽ちある意味に於いて神と協力し、我々の力の及ぶかぎり天の計畫を進めることになるのであると。要するに渠は自然宗教(ナチユラル・レリジヨン)より道德的規則の加添的批准(アディショナル・サンクション)を得來らうとしたのである。

五

アダム、スミスの道德的意識の心理的分析は眞個に巧妙を極めたものであると云はなければならぬ。然かし、弱點は自づから其の中に含まれてゐるのである。一體倫理研究に於いては、心理問題が決して唯一のものではない。どうしても善

惡の根據、本務の標準が何であるかを解釋しなければならぬのである。處が渠の學說に於いては之を見出すことが出來ぬ。前述の如くスミスは道德的判斷を同情なるものに歸したのであるが、かゝる變り易い主觀の感よりして、如何にして道德の權威を導き出すべきかが疑問である。渠が「道德の一般的規則」を說いて來たのは卽ち自づから其の缺陷を認めたものであると云はなければならぬ。而して其の同情なる語も渠によつて常に同一義に用ゐられてゐるものと見ることが出來ぬ。と云ふのは、渠は之を、或は單に他人の情感に關與するの義に用ゐ、或は他人の情感を稱讃するの義に用ゐたからである。で同情が稱讃の源であると渠の說いてゐるのは、其實說明ではなくして單に重語に過ぎないのである。されば、道德的稱讃の感を同情に歸せやうと云ふ企は、全く成功したものと云ふことは出來ぬ。然かし、同情が道德的意識の發展に貢獻する所あるは言を俟たない所である。而かも之を以つて唯一の要素と爲すべからざるのみ。

六

スミスの同情說は倫理學說としては最早發展の餘地なきものと謂はなければ

ぬのであるが、近時之を社會學の方面に應用してこれが、發展を計るものがある。キッヂングは卽ちそれである。蓋しギッヂングは社會的行爲の主原因として類の意識（Conscivusness of kind）を採用し、而して渠の社會學を組織してゐるのであるがこの類の意識なるものは、自分と同類なることを認める意識の狀態を指すもので無論アダム、スミスの說ける同情とは同じからざる點あるにもせよ、兎に角、其れより假り來りたるものなるは明かである。アダム、スミスもまた知己を後世に得たりと謂ふべきである。